

単刀直入

苦境の林業 打開策は

北都留森林組合長 波多野 晃さん(76)

木・人・お金、下流と循環を

— 輸入材が安く、林業は苦しい。北都留森林組合長を6月に引き受け、どんな展望を持っていますか。

国や県の補助金で間伐や枝打ちはあるが、山から木を出す手間賃が高く、丸太はほとんど販売していない。

祖父の代から50・80年をかけた、まじめにコツコツと守ってきたものが、赤字だから市場へ出せない。それを何とかしないと。木だけでなく、森林組合という資産も、何かに活用できないかと考えた。

— 相模原市の津久井郡森林組合や工務店と提携する事業で、「里まちの家」を売り出しますね。

相模原市は人口七十数万人で、山梨県に近い規模のマーケットがある。この事業によって北都留の木を相模原や横浜、東京へ持っていく、家を建てるのが実現する。

北都留は相模川と多摩川の源流域で、森を守ることによって下流の都市住民にいい水を提供する。北都留の木に木曾ヒノキのようなブランド名はまだないが、首都圏の上流、源流の木で建てる家に付加価値をつけたい。

— 空気や水だけでなく、人やお金も循環する社会を実現する。組合は今年5月に決めた経営理念に「森を中心とした持続可能な流域循環型社会の実現」を掲げている。

— ほかにどんな事業を進めますか。

北都留管内の小菅村は昨年、全体が木造の体育館をつくった。上野原市の嚴保育所は来春、地元の丸太を使って木造になる。モデルハウスとして多くの人に見学してほしい。老人ホームを木造で作る時代にもなるだろう。

— 山村は疲弊して元気がないが、山にはいろいろな資源があり、新しい商売に挑戦できる。都会から来る人に、上野

原のキノコや自然のものを食べさせたい。シイタケは原木につけたままで売れる。

木の工芸品は熊を彫った椅子を作ったりする。松ぼっくりはクリスマスリースになる。山野草を栽培し、増やして売る。木の根っこを皮を削っても売り物になる。竹やぶから竹炭も出せる。

心に秘めた物を形にし、成功モデルを示す。森林組合は山を守るだけでなく、地域おこしの役割を果たしたい。

— 音響機器会社を経営した経験をどう生かしますか。

約50年間、社長をやった。販売はまず人に百回頭を下げること。見積もりをし、そこから何十%か引かれても、利

— ご自身の山林はどんな状態ですか。

昭和30年代に植えたヒノキと杉が計4万本くらいある。10年ほど前、土俵岳という山の頂上で小学6年生たちと出会った。子どもたちが遠足でもっと楽しめるようにと、何十本か木を切り、富士山がよく見えるようにした。

山は絶対にウソをつかない。素晴らしい木を育て、きれいな花を咲かせる。紫色のスミシは、いつでも気持ち良く笑って迎えてくれる。

— 観光や子育てに貢献する方法も、上野原市と話し合っている。行政と組合が一体となって里づくり、まちづくりを進める。自然と共生する健康な街をつくりたい。



はたの・あきら 1937年、上野原生まれ。音響機器や消火器の部品を製造する波多野製作所の元社長。2007年から北都留森林組合の理事で、今年6月から組合長。組合員数は約1900人。組合管内の民有林面積は約1万5700畝。

源流の魅力、首都圏へ

「森林組合は山を守ることに力を注いできたが、都会に背を向けていた」と北都留森林組合の職員が言った。「山から下流に向かって、木を使うことが森を守る、とメッセージを伝えたい」。その思いとともに、「里まちの家」事業が相模川の上

取材を終えて

流連携で動き出した。

県東部では、都留市や道志村が桂川・相模川水系の縁で横浜市民と交流し、多摩川源流の小菅村は東京都西部住民を招き入れている。北都留森林組合による相模原市の組合や工務店との提携は、上下流連携をビジネスの領域で深める試みだ。

「流域循環型社会」をめざし、首

都圏に多様なメッセージを伝えよう。小菅村に、せせらぎを歩いたり、巨木を訪ねたりする「源流体験コース」がある。ほかの自治体も源流域の魅力伝える企画を工夫すれば、下流の人たちがもっとやって来るだろう。源流の水の恵みへの共感を育み、木を利用し森を守ることにつなげたい。(村野英一)